

静岡県立磐田南高等学校定時制  
1年 竹下 航平  
(アルバイト 16歳)

「カキーン」

青空の下、白球を追いかけて、僕はグラウンドを走っていた。小・中・高と、僕は野球をやっていた。しかし、大きな怪我をし、野球を辞めざるを得なくなった。そして、高校は野球推薦で入学したため、高校までも辞めることになってしまったのだ。これは、以前通っていた高校での出来事である。

1年生の5月中旬のことである。僕は1年生ながらレギュラーで、試合にも出させていただき、また1年生の責任者という立場もあって、常に本気で試合に挑んでいた。

そして迎えた高校最初の試合。試合が始まり6回になり、自分の打順が回ってきた。打席に立って5球目、悲劇は起こったのだ。

相手投手の放ったボールが、僕の頭めがけて迫ってきたのだ。

「頭に当たる！」と思った瞬間、なぜかボールがスローモーションに見えた。そしてその後の記憶、目が覚めたのは病院のベッドの上だった。それは、人生で初めて「死」を意識した瞬間だった。幸い、ボールが当たったところに異常は無く、僕は命拾いをした。僕は、また野球ができるという期待をした。

しかし、本当の悲劇はここからだった。僕は野球部に戻り、練習を再開した。すると、信じられないことが起こった。ボールに触れないのだ！それは、野球をやっている人間だけがかかる精神的な病氣「イッツプス」だったのだ。練習中にも関わらず、僕はグラウンドから逃げ出してしまった。野球自体が怖くなってしまった。それからは、部活動にも行かず、授業が終わったらそのまま帰宅することが多くなっていった。

野球は、僕にとってそれまでの人生の全てをにかけて取り組んできたものだった。10年間続けた野球を、たった1球のボールで失ってしまった。…どん底だった。

そうこうしているうちに、僕の症状はさらに進んでいた。野球を見るだけでも辛く、野球のことを考えただけでも涙が出てくるようになった。ついには、丸いもの全てが怖くなってしまった。ゴムボールやスポンジボールまでだめになり、完全に立ち直れない状態になって、ついには引きこ

もりの生活になってしまった。今後、一生立ち直れないのだと思った。生活も荒れ、親には暴言を吐き、完全に親を無視し続けるようになった。

部屋には隅っこで体育座りをするだけの、魂の抜けた僕がいた。ご飯も全く食わず、24時間ずつと部屋にこもった。僕の親は相当ストレスを溜め込んでいたと思う。

実はある夜中に、自分の部屋から出て1階に行った際、リビングで母親が泣いているのを見してしまったことがあるのだ。その時僕は、母に声をかけようか迷った。しかし、やはり怖くなり声を掛けることはできなかった。母親にこんな思いをさせているのは、その時の僕自身だったからだ。

そんな生活が3カ月ほど経ったある日、妹に自分の出る野球の試合を見に来て欲しいと言われた。行けるわけがない。行っても、辛くなって家で涙を流すだけだと思った。しかし、妹には僕の症状は教えていなかった。妹は、どうしても見に来てほしいと懇願してきた。断れなかった。

3カ月ぶりに見る野球。僕は一番隅っこで試合を見ていた。しかし、どうしてもだめだった。途中で辛くなり、最後まで試合を見られなかった。試合が終了し、「お兄ちゃん、試合どうだった？」と無邪気な笑顔で聞く妹。思わず涙があふれてきた。不思議そうな顔で、「お兄ちゃんどうしたの？」と妹が言った。それで父と母は、ついに全てを妹に話した。僕が、泣き崩れそうになった時、妹が言った。

「お兄ちゃんと野球できなくなるなんて嫌。もう一回キャッチボールしたいよ。」

その言葉に僕の涙腺は崩壊し、完全に泣き崩れてしまった。しかし同時に不思議なことだが、力がみなぎってきたのだ。

「これからは、妹のために野球を続けよう。」  
そう思えた。

それから、症状は徐々に回復し、今では野球ができるまでになった。本当に……本当に、妹には感謝している。妹のおかげで新たな一歩を踏み出すことができたのだ。そして僕は、大きな壁を一つ乗り越えることができた。これからは、これまで支えてくれた家族に感謝していき、いつか恩返しをしたい。ホームランという大きな恩返しで…。